石井明道士　巻之四

へ 13
3368
12

へ 13
3368
12

石井明道志巻二十之

石井兄弟の内壱人多羅尾
隼人うたれ絶迹事

石井

茶磯榮

石井明道志巻の貮拾之

大正十年八月廿九日寄贈 本大学出版部

目録

一 石井兄弟の内壱人多羅尾
隼人うたれ絶迹事

石井明道志巻の弐拾之

石井兄弟の恩人多羅尾

郷人身を経込事

元禄十二年十二月上旬頃より

敵の在所を知りて甚れまを

偏くよ板倉殿家中と偽れども

御吟所東南をもりしふ日積りて
十文字人伝に聞関楼の間は
大万石らんでう是と知ひ出家に
敷田に家中の書人となりて
高きゝ以て尋ねる事をもして
おもひその追求物眼して
御吟所へこの尾登て御吟所清朝
御あんおゝて海し亀山に在して

東海路の御名家にいる事蔵田
その名跡ゆへ苗字風しなき立航して
古なるとの事を心憎くや命に家臣
富士田と名蹟が相続ぎして桐遺
なじして相続して国足せるの
その中に年家業として年頃の
その時に向ひて実家る者と
問ひ利て座ひ足も退歳

ちと猪牙遊興にて御るまんれい[illegible]
別して二合半大[illegible]に迷惑也
里中の若[illegible]あれが若[illegible]し
でしゆ[illegible]を[illegible]も[illegible]なが
所一[illegible]諸[illegible]風[illegible]里中へ
手引[illegible]ゆる[illegible]
しゆ[illegible]月[illegible]中[illegible]
来[illegible]て[illegible]

里中と[illegible]する[illegible]人
とか[illegible]若[illegible]人[illegible]
揚よし揚金[illegible]
ども里中にての[illegible]
すべし此国[illegible]より[illegible]
此[illegible]まじく
[illegible]山よ[illegible]
道中金[illegible]揚屋の外[illegible]

しらべもひとしく琴御律の類ひも
備へありしかども今一口なりしが
お損の者来りてしよ是らく
此むかしけ道源が忠臣家にけるし
先盃とし忠臣を立ならべ
名前の同さへ申合を御らんが
寺岡平右衛門千崎弥五郎まで
御なかりて高師直(?)江戸の

千崎と同じ亀山の城城にて
幸ひなりし古月と城主(?)国の
事なりしが亀山の親子能く
しるしとて十が十まで
笑ならび寿(?)悦びて心得
なき事塩冶判官にて是よりても
奥州より平右衛門其身ども
同道して登り通し彼が勘平(?)

いろでミその後捨置しが是に氷脈
本名嫡子よし方を語じ河内澄深
本望をとげ毎年白書の字く
跡迄猥羅あかしが是は吉事
とも申安悟としいかもの一
人遠ひまて阿部の亀山に天の
歌かのかげしくぞうむ念ぞごく
否ふして本名合部ありける

面を改めつゝる袖萩が安倍が
叶ふ世のうへ是より程く是に
奥州へ帰りて袖萩とうけ
八ツ追附亀山へ登る否し汝て
先く三保安倍と西に方便と
ありて袖が本名中国と
尋よし見て若みし食まて
生悦部重合房が待くとありつく

岩剛千太郎と名を替て目出度
本国に帰り早速鞍馬山の里人
岩窟に招かれ剛勇を振ひ
武術修行上下中将下将の
まゝ迄心付く命に無難足
十四二ツの頃より剣術に源氏流
の出かしおはれとおもしふ尋ぬる
まゝ生まれ江戸家中まわり丈と

有のまゝもかくさるほどの
剣術の道にて古月割にて
御眼鏡を余りまて御文珍を
しかはしけぬもの御作の御恨
けつらく悦びて御出处にいたりて
八月十八日江戸表御発駕鞍馬
軍人が供して岩剛千太郎は竜山
去て盆てしけ兄の源次郎は出丸

まじく音月が菊草と詠けれども
岩城まして亀山と云ふ
いつしかれば祖師聖人とぞ称し奉る
奥州さして下向し玉ひ
鏡から[illegible]て経百里ごとの法
道中の神社仏閣と云ふ
よしあの[illegible]宗[illegible]
安社と称し[illegible]中の額とし

阿賀川と通ぐしゆく父の菩提為
[illegible]称し祖師が[illegible]百ゆき
[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]しぬへの法大事とし阿賀川と
[illegible]ふ日数[illegible]く十方[illegible]
の東名[illegible]と[illegible]野の名
薬師亀山[illegible]の[illegible]
[illegible]ひの為大[illegible]く[illegible]法の

面しらぬ親類縁者の對面かい
恩愛の中よりも猶まれ百姓の人
さがなき所にて候ゆうなる職者
の御親類御家中に見ひよふ舞の
御舎兄にして千太郎は三段
業因にが菅原家と卿來る
奈らで待ども來まさず何ました
ゆかしき後人待くるきしけが

菅原渉当中にて指極まで引結て
しまずい去仕あし何仕表南ぞ
三寶生死浮世の習ひや大空
叶ハずして菅原万一個果なば
如何せんとし天よ初て嘆
と待しが九月廿四日に極めし
ぢのきとしかくて云笑よも知が
東西の眼力塚墨柳の上下に

朱鞘の大小刃物[illegible]千石通の
侍十四[illegible]軽き人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]江戸亀戸に二人と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]三十[illegible]
[illegible]
[illegible]

とりして役を勤めずして狂言しと
答に赤堀吏して咲掛の師が
顔と気は白眼のつきしと
帰りける後ひとかけ[illegible]し古跡
遂てふりん送りし祖新家新蔵へが
岩叢[illegible]源左衛門来りしかり
源左衛門へどのかれくなるいかの
水しかし[illegible]しゃうし[illegible]の

御敵まして何方ぞし西海門内
まして新比叡長蔵へ後陣を何を
名[illegible]を流が侍や亀山へ二人
これまでざるまんしかく源左衛門へい
別しれける千太郎が厩舘の
富士田がおしくよ融通が貞忠の
緒深に小縁く十が十まで是なり
掛りあり[illegible]しおりしが兄源次郎も

今は来ことし氷くもりが玄圃生囲
悩みある證拠御しるしが塩冶判官が
寿るゑんと一日千秋と待明
しける去程に九月十三日の夜になんなく
ところ主人白尾隼人年来の恩に
に松本小文治小栗小太郎及川
刑部石井城三明石道録寺岡
月そらんがてらの恭合何る中にも

及川刑部進ことしやしれ者も
当世の上に頼み承之
主君共にぞ一通遂る事
と云のしれが事を主君白尾隼人され
ばの事を手の内にて悟る
割し主君の寺岡中にて
かし田書いかれども早く
仕年主承らんと合しが丈ともに

手紙遣らんとて一通差遣し候所
御使参らんとの返答にて年来
の玄老茶道の一寸外とは道し
大念人をし御手紙かくして用事先
遅く成候中訳候て寛久支
各御心も篤気致され候御猪茶
以来も御座候年の付返りしてせ
綸よ各への外一言は別して加へ

じけなく存候然ば近日御とんと一禮述
致候ぬ返り候ば衣のかばのしも
處柿の茶葉よりて致之可
為参る事あれば急度御座候へども
の侍衆人ならば何事もの然
しして来る處を厚く御仕
手續く致さる事は古見の
事なく千太郎し新参なれ

久しき節あし大夫祐が軽尻
しほかりしまゝゆくよそめし石井に
若き鶴々つき武調法是中
子方は深かしこがれかりし枕戸の
しげくしてたえしまさと縄ひき給る
うてども蒼ぐく出る茶売りくと
元あしぐ千太郎兵衛もしとかし
まうる知ふ所之印小家小太郎と明屋

道俗しき春あつき唯今家竿に
二中あ通きいりきかふ手出もし
みん判も西ひさその聊も春ふ
みんとれ旅仕の言い家も付火
ごろれ葉饒あいき宿縁が
悩数をえ行けげんせいし夜その
古く鎌小年のはくら太刀鉾も
七十三代しるふも最用毛歳へふ

縞の分の見男に茶をしだし
膝くりと出まかせ手わたし扇くしておち
茶碗を葡萄が膝に落しきつと
驚きて土器きせぼうし茶を紙に
きせし葡萄が赤くて紅色をし
前にある人の年人に毒なき千万
あさ柳の根性のわるしはなし
まんさんしかして物騒にして

佐野島のみる経机ならべと硯ふだ
しき茶碗がまるひげ土落し
うつし灯籠なしなじしてもかしを
年頃見しとれてくるあを走して
十露盤かし来石の螺鈿の
松茸支て里弟してろず
陰ひ銭集し盃重ねて経机に
出し籠業をまくと類もあつて

御ぞ隠し覗く桐定もの
四海隠れても聞え和らぬ
若業林平が業もおよぶ殺下
嵐小袈が三郎の三十郎大江の
坂東おとしらしと松本小文治
若菜花のごとく市川宗十郎
さぞ人前手その義に声寄
五徳の出来其の之かの是かぶれ

千大郎が表よそう家御座とも
と云ふらんく網法のめんと
気なくと丈とおよ畳てと若菜も
大谷寿へつくて忍ふか姫あて
坂田来しておかしの三人の盛
坊也花寄御寄ましても一所かと
三人の中村是非かくうらひ
出來も年源猶も絵くし

建久四年五月のはじめつかた
ころしも営の庭に右幕下と
ましますよりとも一族の
面々めしあつめて松浦振て
みなてうれぐ酒宴に碎けて
若者も御らんじ興ある浮
木の亀とうどんげのむかし
へしかりしを見物ありしに

十郎がつまに虎といふ遊女有
ちらぎぬ嫁しりをあかし
曽我の十郎五郎とて兄弟
ありしが親の敵工藤
祐経をねらひて一太刀
恨みんと心にかけし
さても其後兄弟は
みなしくしが巻狩の折

恨みん事を聞かなし事じ
事實あらずとしかゆえの桜
ざりしと跡なき親の歌に
冤罪ゆかりと呼ぶるを血の声に
目をと覚まし起きあがりし戸出
我もの手品を見るやのかくし
かはばかりそつさえづりもを
おんしときくさる時宗遺跡

ありさまを見しゆへ三ツの時
よりしも十八年の天津風しま
吹く雲の落して月夜の夢
一詩よりかゆえの桜まで
きかで祖父右衛門兄
末のなきのとし膝もえらに
うつむくみなとしが袖濡らし
行とし行とう立れて出ま

さぬしやうる其事ありしが面白し
しくしく三みし思ひ出さるゝ

石井明道志巻弐拾三終

石井明道志巻の弐拾四

目録

一 石井源次郎亀山に至る事

石井明道士巻の弐拾尺

石井源次郎亀山に至る事

爰に引続し事[illegible]に[illegible]言

[illegible]言[illegible]し[illegible]て[illegible]ひし

千太郎が十[illegible]中[illegible][illegible]

[illegible]番面白し[illegible]時

しりの始めハ京大坂にて始りしを
後に加賀奉書と紙を江戸
にして土佐にて土佐紙
紀繁将ありしの三千年ハ日し
人国残し八九年以来ハ西京
にほどて年々一国白倉芝地とを
外もと浄瑠璃語る事けりとて
上海にハ一毎年として しりの三味線小

其をおろて是しやうの筆の御を
蚕をなるの菖蒲をと始を門ろあり
毎日の葉の類十舟とありて
十方にてれ七国三中ゟ風まれ
迷ゑ仕ん三千千里の上文
しりハ扇が段くとや右のし
浄めんと範て宜しらんや集人
どの此家其とても おかどもかし

浮くと揺つく思ひをし千太郎
お雪にしや揺つく上よと主人の
命下播なく妻縁が後く早を
早しれが云思外しと押風ねば
不調法まれなくどもと千太郎
袖にまろくく譜はとうけく
云金やるしを云父の歎おのれ
肩背立碍ふく〳〵笑年の恨さ

はしを盗み見ん分別めつや六ツの頃
よりも死なが一所と云かくしよふ
兄んが恨しきのあはれなるが思ひの
紀になれ金ふそものし第一是非
人違ひ外に歎のある金ぞやし
鰥みかるに悩なる小年の縁の
二ツのはなるな名をと笑ふぎるれ
おもりかに叶ふね大事の場場思

忠なりし家などの自然と家来
手先の力に指してこそ其方は見えけれど
違ひ手先にしては力がなるしま
かし将に掟をしては昔ひさし
今家来なる十五切おのしうな次座
しきぞ珍じ亀山に供致されは
まかり名にて剛しいふぞ岩見重太郎
とゆしまして岩見を発州の立左

国に偏国で備前まて行き給ひ
御なま備前にて岡山城下なるか
御くやの如くなれは岡山まて尋ね来て
ゆける伊木豊後の組に三百石と
覚へしは池田にては壹万三千石
しおほくは池田家頭の津田左源太
して千八百石まてにしかも相違
なし備前城にて引替

御紀十一里らし息ハ塩冶判官
姫路へハ幼きより明石へハ
幼くやさしよりも明石ハ親類なきや
大佐なくハ妻ゆゑ親にして存生なる御養子か
なりし時妻人も相果やハ兄弟
是なくし八人大座ハ妻結兄弟
持しナアそのはう御人など旦人女で
大座皆く国よ居るや女

惣領にて縁付男兄弟ハ人
国女人国よ相続して持家若と
弟が兄一人に早くてかとぢやしハ
親ばかりも事なしが左様よ苦労
さそが跡をまれ有り此
ものが何ものの若兄よ源蔵
としのもの主人端に居るや
持家兄して五郎ともして主人に

漸とはなりぬ年頃は當年廿一歳
みくりや雑色舩子とも覚しけれは三千
八九百余人ともおよふ盛し扨も
偏にし大気ありけれとも今更し
招く世界をし置ていとも
夢のみを頼み天をはかるも観の
面ざしに紛ふかたも宿りにしき
水の泡の早く消しも其数はかりなし

とも肩先つらぬけ一の胸九の骨
はつれを切すゑしと是大事の
場甚深しく手はやく抑へ
敷くと討手叶はず合せつる
八ツの種金取頭をかくしもを
しざい以て古参しき地も曲りと
又数多を頃な行きし桜び
忽ち見え三千里が難も及ばず

勧進帳(くわんじんちやう)を仕舞(しまひ)にして云分(いひぶん)し
て座敷(ざしき)をたちよらんとする時(とき)來(きた)る人(ひと)ありて
能(のう)ありて御恩(ごおん)に一禮(しうれい)述(のべ)千太郎(せんたらう)が
手燭(てしよく)を持(もち)式臺(しきだい)へ送(おく)りし跡(あと)を
氣(き)わけしらずして扇(さすて)長(てうざ)に吉(きよ)りて
辛氣(しんき)とてさらぬ體(てい)にて隔(へだ)てげ折(をり)し
面(すきさ)莫(き)くも嘉(き)しく家(け)遂(ず)にまし親(しんちう)に
銅(とか)んとうけ兼(さすて)もし能(よく)き親(おや)に

よしにてよく計(ぐら)に十寺(ころ)を
首尾(しゆび)と經(きやう)しけ得(うく)るお猿星(さるほし)に
千太郎(せんたらう)是(これ)受(きく)んして生園(せうさく)と
尋(たづね)ん名(しんゑ)高(がう)縁(えう)の若葉(わかば)名(な)振(ふり)しと
親(こうん)氣(い)ある水(すい)月(きや)ある名(な)の流(しりん)
よもお名(みんめう)園(その)と尋(じん)ねるお野(しりみ)
邪(か)得(す)しして銅(どん)紺(じゆ)の流(る)名(めん)まと
仰(と)くが治(ぢ)深(げん)流(てう)しもしや手(まうかさ)縁

東堂津田流といふは本國にて
奥州松倉鞠谷流は本國流
三ヶ条とし桐遣を雅は伝へ
本國は那須に[illegible]て本居
藤白の若宮へとして筆[illegible]
銀とて角切がくふ[illegible]目猫[illegible]
郷へつる[illegible]は神社[illegible]清[illegible]郷の
ふして若宮へ梶原源太が[illegible]

召して東へ来て出[illegible]栗[illegible]
その思ひ強も[illegible]し雲をとりて
どふ梶原源太郎奥州松倉城下
よりて相馬伊達福島三春郡山
本宮堀川仙臺南部外濱
秋田[illegible]上[illegible]行[illegible]つくて
尊[illegible]まゝ出羽九月より
翌年の正月二月にあまねく

しかども袖卿に出て遊ぶ所が
是非なくさぞや男が待兼しに
是よりては亀山におもむき
運を天に任せけりてと奥州
をさして道遠くも暇乞とて
歎しても袖卿にゆかんとすると
也しに二月廿日相州小田原の
手前なる酒匂川迄着せし所

河瀬川に陸ると云る文左衛門が来る
百卿におのづからも御遊びとを
是よりまた兵に勘とがし源次郎
ありける去年の秋より奥州に
居つく袖卿と身をあはせても
振なき出て会ぞ是非なき亀山之
登らせしかば百卿大いに悦び
皆今こそて歎の事もうち捨てし

かくて大寒や清明八月晦節
さ日亀山く御紙の光り御心寄を
様ハさしおく其外御祝ひを兼定あて
御あし、さ日まれ袖御算す御を
御同道ゆ茶屋しれゐ待
にて一条御役を足なく候ハ
御ひやし吉なる太下御判の
の伊勢鏡に其方く進ま

宮の兄袖御をしこしもの御や
野郊あくりけの川原ま御人を
あて候御を我をとのみ御出に
御書状を候ゆしれと頼みて
互寄合しして一通を候ゆを
被ん致しし処吉日九月上旬を
さゆいよ相頼ひなくりけの
御人にともに御ゆかれし幸又

清秋山織に於て相伝寺領に於て
ゑるもとを此見寺の法飛のうへ
寂しき孝則し路金を施して
逆ひふ方ゆしくし中郷し是よりを
東ふ了浅てあてれしらふ風収寺
洞と流し足俊や定めて観気
去ん碑なし秘のうちしきい
殊りけ妙説極倉とが御頭と

あく峯まりしふ比企か谷ハ亨が
跡まん逢ハざるハ残念なれども
称る由緒をもつて祖師存命
みく五智歓喜しと上ハ寺ト
菊か谷ゟ野別くゟて沙弥居して
泉し亀山く日道とよ由緒
亀山よりて古居岩ハ東照寺に
古跡とさもく河納川く一遍を

中紙しや無しと砂糖も右の通
表田中笑無しと何か会
路金の内指気をよし小判五両
其後し窓に前し金丈を
風紙節大切證文富士の裾野
の曽我寺へ行額ひとりゐて
阿部川砂糖が書きおよ進ひて
金願に嘆し見殺し住りゐて

三月廿四日泉州亀山の若藤節や
弥三郎らか落着く而千太郎遂
一通と送り千太郎見と約束
早速来りつく将が事大かし
おうじ丈よりを若編し三倉も
表田語りゐて見も砂糖が吹具
海し一石砂糖が運ひの始まりと語り
気の国別まで仕事をし来りければ

袖巻が来ありきとすへくなん云ふと
達もゆしても事ふ為かずがなく
我も告節めをもしつ居てみが
千太郎がしらくすれがの事業も
箪人ぶ小商月まぎ節めしが商
江戸の稼せもよかしと暇な
とりて鉄人とうつの身我が肩
代をとうづまし出して我は引

とりて今ては及川利船もらせ立別
諸の家来と共にて越え夏ての
彼をとりつく菜日本の素人
小者しと思をなして稲荷
小路の内に居として商人寺
よくて確る往来を見れ
参日詣流業襄成るそもの商家が
高峰高貴しつ動くふ真実家

そのあしたが證人は郡にまかりて
まづ町よりて此方の方へ道路
して袖衿なくも引御出し
此節今宵あまで来てさ所に
中辻にして出合して
そのお口より元と傳へ白洲へ路へ
舞台にて此と由てとのよしを
此しる所業して千太郎とに

入魂なく當時彼が判役まで
家に仕中なりしが女まあらし
饗應しけるが家へ亀山の宿へ
里見原左衛門としるの人の居處知る
なく千太郎とき身よりて親きに
去ままに此る下役年して奉公をとて
千太郎は問くまで取るとゆへ
みん歩とふ町へてく行と致されし

なれのこ物奇(ぶつき)なるやうにて鶯(うぐ)ひすなる
さんしの閑陀(しやび)わたり十年(ねんごろ)が
節(つと)めよく様(よう)くり引(ひき)出(じ)しなる
あやしく云(いひ)ければ三年の毒(どく)
なれしん(ちん)ぶんなれど閑陀(しやび)もさればが
牛馬(らしもの)の道具(どうぐ)皆(めい)めが手(て)ありて
三貫八百目出して申されば他(わう)くも
先(さき)くも浮(ゆう)きまにとらふ丈(それ)よかれ

江戸よりて煙(けむ)りよりは煙草(たばこ)三びやうに
新(しん)みまいをすまひとりるすへ
奉(ほう)れなし気(とく)国(くに)何(す)ねが江戸あり
三方(ほう)に奉(しま)りし江戸人とかんぼ(ご)やう(かん)に
のぞんで女(ど)房奉(た)あれども江戸に
縫(ぬい)ぞ嫁(ひと)人指(ゆび)たるえん(む)延(とん)ちとり
仰(ぢん)しと申(どく)さるの中つかに藝(げい)ちかが
あり(え)てしも思ひぞ浮(らう)世(ろう)ならこそあり

喜撰とよみし狆の亀山に揩
手でとろく武百目峠の掛金
江戸までも辻番節めても武百目
三百目にて印籠を玉手事よせて
須賀が都にして事にて小野登を
万年の眼も撥河墓を粗言して
星合十二段此度常盤年若
團十郎が武蔵坊弁慶てう

さん萬代吉三の大当で竹に雀
雪平清九郎が乱女黒も山中
平十郎名代そらの高名なく
跡より呼んまでそんけらふし
丈計も高しも渋まれて恵比
りうを鯛粗言んよふと猫兄と
百文くらゐてのる家銀言は
青道しるて七河羽羽が極楽

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]四ツ谷[illegible]

深川八幡[illegible]

[illegible]

[illegible]浅草[illegible]

[illegible]

[illegible]

是とて愚しかるふるひ本所
瑞実書出し護国寺さあがはし
並数多里といふ大寺に
いふといふ汐里へ遍く着は
往来に諸人身がかけ多かし
色数多里とれ名付て金銀は
出るもの目ふれる計り一生の
療みをんしとかへもさふ

老いのこれ愚しと笑へと立
けりを去りし面妻し精霊へ
法度し笑おのずから因で以免と
いふて出れ江戸の流てものが
みえる也の出燈の沙鐘な面と
愚くし中て愚しお大陽飯
我して飾し深し友達どもが目録
ならびして坪廻の間へされと

じくく振出し なりとぞなるも
なりて高中なが 百と大百まで 高ふ
かまへ三枚上げくあれ八と三の
羅かは七めの螺居二て凡その
伺坐を是かんよし三ヶ年の
探ふなりて飛鳥ふし金龍
なく霊しなが幸としくて是と
岩塔をも呼もちぞ江戸ふ

愁そ殷出し凡金銀凡山ありて
江戸ま増あ地ちくなれじも暫く
りんとうれ毛のありし江戸なふ
拝ばをりしけ年が伊賀様金龍
なく笑人く貴ふ江戸が寂しそ
ありごりぞまき首の御きらぐ
江戸人中つく是ありいと安
幸あて収を通じ行まくも

世の為とし右の通り不仕合で
銭が一文なくてならぬとて頼母
ありとも男子を今迄の家源ふ
のみして家の見聞次第の男の道
をも尽さ道中路銀武貫か三貫は
借りと云ども用意無し遍
乞われけがし幸しあり
葉してしらぬ足の幸よ入く

尚申しも勤めよし其切米の内
から此弟着尽して少しも遅さし
絹取を知き帳も引るを大切に
さしたれ是くのなりまき御が
入家ども江戸表の手婦女小機意
の事もと情文ちの三九としち家
情文北もわし銅ともを不及事
江戸東西女里江戸やし江戸の

因し亀山といふ十二丈の豆腐
とし雙六すんば遠く千言も
づらぬ唱ゑ事くし云ければ
いよいよそのともし蕗ゑ子母の
あらん事をゆく文殊と千太郎
五郎に三歩金指導し是にて
江戸の條收や訓に高坂
風呂屋河 場てもの諸見人

狼三太夫としふもの高き三十日ふ
女日記 卿公御の仕待給人
伝る河一の西家ふ在ると嘲し
ほしんば 伊賀物いと哀ゑのしんぞぞ
はしをも頼

石井明道家泰武裕良誌